

昭和四八年二月二〇日第一刷発行

定価・一、五〇〇円

著者 松浦 一

発行者 高橋 謙

発行所 株式会社 白鳳社

東京都千代田区神田神保町一―二〇

電話・東京(03)二九一―七五七一

振替・東京九二二四一

© Hajime Matuura 1973
1390-1414-6906

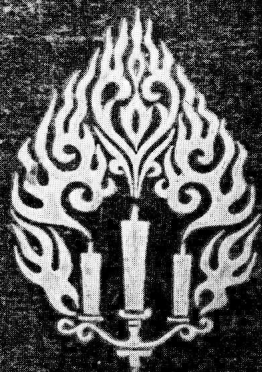


昭和36年12月18日撮影

松浦一著

文學の本質

大日本圖書株式會社



左上／初版本の扉（雲洞杉谷義良 筆）

右下／同表紙絵（増田牧山 画）

松浦 一著

文学の本質

谷萩弘道解説

白風社
名著選

《凡例》

一、本書は、大日本図書株式会社版『文学の本質』（大正十二年七月刊、第十版）を底本とし、必要に応じて誠信書房版『改修文学の本質』（昭和三十三年十月刊）を参照した。

二、本書の表記は、いわゆる現代表記に改めたが、その主な点は次のとおりである。

- (1) 漢字は、当用漢字字体表に掲げられているものは新字体を用いた。
- (2) 当用漢字の範囲での同音の漢字による書き換えは、これを行わない。ただし、同一語で異なった漢字が使われているものは、現在多く用いられている漢字に統一した。
- (3) かなづかいは、古文の引用文を除き、すべて現代かなづかいに改めた。
- (4) 副詞、接統詞などでかな書きを慣用とするものは、おおむね底本の漢字をかなに改めたほか、他の品詞でも、現在多く用いられていない漢字は、語意をそこなわない範囲においてかなに改めた。
- (5) 送りがなは、原則として内閣告示「送りがなのつけ方」に拠って、一部改めた。
- (6) 外国語（固有名称を含む）のかたかな表記は、原則として底本の表記を生かしたが、現在多く用いられている表記に改めたものもある。なお、漢字で表わされている外国語は、かたかな表記に改めた。
- (7) 本文およびふりがな中でかたかなのものは、底本のままとした。
- (8) ふりがなは、底本にあるもののほか、当用漢字音訓表にその音訓が認められていないもの、および誤謬のおそれがあるものに付する方針で、各講ごとに初出の箇所付した。ただし、歴史的かなづかひのまま引用したものには、ふりがなも歴史的かなづかいとした。
- (9) 漢文に付された底本の捨てがなは、それをはずし、代りに読下し文をへへに入れてその脇に示した。
- 三、本文中にゴシック（太字）で掲げた小見出しは、底本では目次のみに掲げられているものであるが、読者の便を計るため、本書では本文中にも挿入した。
- 四、底本の本文中に示されている外国人名の原綴のうち、本書で巻末の注釈に掲げたものについては、本文中から削除した。
- 五、本文傍に*印を付した語または文は、巻末に注釈をつけたものである。
- 六、なお、底本の中の明らかな誤植はこれを正した。

序

本書は最近一年間私が東京帝国大学文科大学にて文学概論として同一の題名のもとに文学科一般に講じたるものをさらに一般の読者に適するように加筆したものであります

人は日々に死に近づく路を踏んで行く。私はわが生の一つの記念として私年来懐いている文学の根本義についての信念をいま江湖に発表する機会を得たのを衷心愉快に感じます。本書は著者ではありません。けれども教壇に立つてこの講義をなしたとき、本書をもって江湖の諸子に見ゆるとき、生死の門の扉は開いて、生に通じ死に通ずる永遠なる宇宙の力は私の胸を絞ってこの声を出させました。三十五年を貫いて不思議なる運命に絡みついた記憶の糸をいまさらに手繰り寄せ、現在の身の幸と不幸と、不平と自尊と、涙と血との身に帰るとき、この大なる力のみ身を寄する柱となってきたのであります。しかしてこの力を信ずるところに私の文学上の信念もその基礎を得たのであります。

しかしながら運命のあらゆる他の影響よりも、いわんや上滑りなる学者学問、職業学問のあらゆる似而非智識よりも、私に最大の教訓を垂れたのは——私の文学上の信念にも最も多く培ってくれたのは——愛児宏の死でありました。宏はわずかに半歳の寿をもって明治四十四年五月二日残酷なる消化不良のために、残酷なる断食療法のもとに、大学病院の病室で悶死しました。その波立てる胸、その哀願の眼、その愁訴の眉、その衰えゆく泣き声、寝台の側に不安の眼を瞠てその毒素を吐く回数を数うる私、番茶もてその乾く唇を時々湿すことのみを許された妻、その悲惨なる光景はここに言う要はありますまい。ただ私が言いたいと思うことはその死んだ一夜の感じであります。

病勢の衰えたのに少しく安堵して私は夕刻帰宅しました。連日の看護の疲労を少しでも回復したいと思ったのであります。しかしながら床に就いてもなかなか眠られぬ。そのうちに無慙な電話がかかってきた、宏は容態が悪いと。その夜は暗い夜であった。私の重い重い心を乗せた人力車は私の住宅のある牛込から本郷へと駈けつけた。星は意味ありげに光っている、街燈は幽霊のように並んでいる。車上の重い心は言った、「ああ大なるものは死だ。兄は死ぬ。兄の死に駈けつける身もただわずかの間を生きのびて、また死んでゆくばかりである。これがすべての結論だ。この結論に触れぬ研究、この結論を忘れた議論は、畢竟ふざけた学問だ。理窟でこね上げる研究はもうやめた。自分はいつそ抒情詩を歌って一生を終わろうか。いわゆる学問の權威は人間第一義の問題にぶつかるときにはたいてい煙になってしまふ。生と死とを一貫する第一義、ここまで

喰い込んでゆかなければ学問は死学問だ。いやだいやだ、死学問はいやだ。死学者はいやだ。」

この感じはその後乃木大将の悲壮なる死、親友鶴田機水の死に会つていよいよその力を加えてきました。現在私は人間第一義の問題に腰を据えた権威あるものでなければ、少なくとも人間の心靈を取り扱うわれわれの文学の世界では、何ものも許すべきものではないと思います。きざな学者の文学上の意見がなんだ。みずみずしい文学を固陋な節にかけてしまつて、糞のような要素を掃き寄せることだけを知る愚劣な者の説がなんだ。ハイカラの大道学問とひからびた術学者とは腐った魚の腸よりもまだいやだ。

こういう考えで古来の幽玄なる日本の芸風または文芸の奥秘というべきものに接してみると、ありがたいとまでに思わせられるものがあります。私の言う文芸の精神は立派にこういうものの中に現われている。現に精神上の文明は西洋を去つて東洋に赴いてくるではありませぬか。世界の大勢は、ハイカラ学者がなお泰西の糟粕をこの地で尊重している間に、かの地の堤防を切つて落として、思想の潮流を東へ東へと傾けているではありませぬか。今はわれわれがさらに大なる覚悟を要する時であります。人間の根柢を支配する力ある文学上の信念を固むるのは、まして焦眉の急務であります。

私はこういう考えから最近の講義であるにもかかわらず、この書をいま公表することとしたのであります。本書の扉の文字は雲洞杉谷義良師の筆、また表紙の画は増田牧山君の筆であります。本書の出版に際してこの両氏が厚き同情をもつてこの書と画とを寄せてくださったのは、私の深

く感謝するところであります。

大正四年十月

松
浦
一
識

目次

序……………七

第一講 序 説……………二五

文学の実体実相（二五） 文学の威厳（二八） 文学と文学作品と
の別（三〇） 吾人の立脚地（三三） 後期印象派の詩（三五） 立
体派の詩（三六） 旋律^{リズム}の世界の芸術的表現（四七）

第二講 文学の旋律的世界と絵画的世界……………三

原始人の住める旋律の世界（三三） マケンジ教授の挙げたる旋
律の魅力を説明せる八種の仮定（三六） その説明の批評（三五）
旋律の形、反復循環（三七） 詩の行にて組み立てし画「ベグニ

ツツ牧人団」の詩人の「二つの峰のバルナス山の模写」(七四)
同一趣向に成れるサウジのロードアの急流の詩(七五) 旋律
的統一と絵画的統一(八二) 両者に共通なる水平的統一と垂直
的統一(八三) 「生命および美」の唯一世界(八六) 美を無用
視して生命を追求するの陋(八八) 美と生命とは一而不二(九〇)
詩を絵画と見る詩学(九二) 文学に適用したる「注意の経済」
(九七) 旋律的世界と絵画的世界とを結合せんとする経済説の
無価値(九八) 余韻・余情(一〇一) 『世阿弥十六部集』の芸術
論(一〇二) 絶対の自由と精神の遊樂(一二一) 文学の游神と酒
の游神(一二三)

第三講 靈数三……………三六

酒の「酔醒山」と文学の「酔醒山」(三六) 実生活と異なれる
文学の「酔醒山」(三六) 文学の「酔醒山」に産する詩人型、
小説家および戯曲家型の作品の異同(三七) 靈数三(三三)
「三段の法則」(三九) 同情と想像力(四〇) ラスキンの創作
的想像力の三つの分類(四二) 聯想的想像力と創造の神ブラ
マー(四四) 洞察的想像力と保存の神ウィッシュヌ(四七) 直

覺の価値と同情の価値 (二四八) 芸道に現われたる同情 (二五〇)
同情の神ヴィシュヌの十の化身 (二五七) 冥想的想像力 (二六六)
文芸の理想化 エソラゴト esoragoto (二六九) 洒脱の価値 (二七二) 辞世の
意味 (二七三) 破壊に伴う再生 (二七七) 俳諧の虚実論 (二七九)
虚より出づる輕妙と同情 (二八四) 虚より出づる莊重と実より出
づる莊重 (二八六) 破壊・再造の神シヴァ (二九二) 再生・生殖
の考えと神秘主義 (二九四) 神秘主義・象徵主義の権威 (二九六)
愛と神秘主義 (二九八) 涅槃の戸を開く愛 (二九九) ダンテとベ
アトリーチェ (三〇二) 文学および宗教の求むる「愚」(三〇八)

第四講 文学の涅槃 三二

文学の往相廻向と還相廻向 (三二二) 『禪竹集』の六輪一露 (三三四)
文学の涅槃 (三三六) タゴールの詩を対照して解説したる六輪一
露の意味 (三七七) 涅槃文学の代表作 ワーグナーの『トリスタ
ンとイゾルデ』(三五〇)

注 釈	二六五
解 説	三六
はじめに	三六
一、松浦文学の背景	三七
二、比較文学の成立	三三
三、松浦文学の内包	三九
松浦 一 著書目録	三五
松浦 一 年譜	三五

第一講 序 説

この講義では、文学というものの究極の意味、また文学が人間に齎す究極の使命とはこのよう
 なものであらうと、私が信じているままをお話ししようと思うのであります。
 文学の実体実相

近ごろベルクソンらによって盛んに唱道せられて、多くの思想家は自己の学
 問に対する態度を標榜する鮮明なる旗幟として、実体実相という語を真先に推し立てて、縦横無
 尽に進んで行く気運となりました。自然の事物にせよ、人間の事物にせよ、ひとたび人間の眼を
 くぐって現われてくるときには、そのままではどうしても人間的の色彩を帯びております。ある
 事物が人間的の色彩を帯びているということは、われわれの利害もしくは因襲が種々様々に絡み
 ついている実生活に影響せられて、二重にも三重にも人間の着物を着てしまい、したがってその
 事物の真相はどこにあるかわからないようになることと言うのであります。そこでわれわ